
血に穢れぬ白い綿

元素猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

血に穢れぬ白い綿

【Nコード】

N9264X

【作者名】

元素猫

【あらすじ】

晴れることのない暗雲が空を覆う世界。殺戮を楽しむアルマーナフは、呪いを受けて隔離された人々と出会い、失った心を取り戻して行く。

第一話 獣

大地を覆うように点在する橙色の光は、人々の営みを示す街の明かりだった。人々は息をひそめ、小さな炎の明かりだけが救いのように、ゆらめきを凝視し、手をかざして暖を取りながら長い夜を過ごす。

カーテンの隙間から覗くその姿は、見る者に畏怖嫌厭いふけんえんの情をいだかせる。ゆえに彼らは、表に出ることを好まなかった。

闇の中で行く手を遮るようにそびえるエルハー山の頂、それ自体が発光しているかのように真つ赤な幹を不気味に浮き上がらせた呪木ぼくは、支配者のように暗雲の冠をいたたく。弾幕のように厚い雲は昼夜を問わず空を隠し、昼間でも嵐の前のような薄暗さだった。その巨大な木がいつからあるのか知るものはないが、空の暗雲が晴れないのは呪木のせいだと信じられている。

「アルマーナフ」

名前を呼ばれて、黒髪の精悍な男は窓から室内に視線を移動させた。そこには、目を覆いたくなるような凄惨な光景が広がっている。癩癩かんしゃくを起こした子供が、人形を滅茶苦茶に壊してしまったかのような、野のケモノですらもう少し上品だろうと思えるほど、無残に刻まれた人体の部位が散らばっていた。それはどこか、滑稽にすら思える光景だった。

そんな中で、金髪を無造作に伸ばした男が、壮齡の男の、頭髪の薄い頭に銃口を押しつけていた。窓際で外を眺めていた彼　　アルマーナフを呼んだのは、その金髪の男のようだ。

「こいつ、どうするよ？」

金髪の男が尋ねると、アルマーナフは刃渡り三十センチほどの刀をプラプラさせながら、楽しそうに笑った。

彼は殺戮さつりくが好きだった。金を奪うのは二の次で、欲しいのは貴族たちが見せる醜い生の執着心だ。いつもは貧乏人を蔑むような目で

見る連中が、泣きながら命乞いをし、命令せずとも彼の足にしがみついて靴にキスをする。媚びる眼差しでアルマーナフを見上げ、自分の妻や娘を躊躇なく差し出す者までいた。

アルマーナフはそんな貴族の惨めな姿を見るのが、楽しくて仕方がなかったのだ。取り繕った幸福をはぎ取り、醜い真実をさらけ出す。それこそが、彼の喜びだった。

「俺は金目のものを探してくるぜ」

金髪の男が肩をすくめて部屋を出てゆくと同時に、眉をひそめたくなるような断末魔の叫びが響いた。

貴族たちの屋敷が並ぶ中心部を抜けて、小さな民家が軒を並べる区画の先には、エルハー山へと続く広大な森林が広がっていた。そこはかつて、まだ世界に青空があった頃に狩猟場として多くの人々が入り出す所で、貴族の別荘も湖の周辺に建ち並んでいた。

現在そこは収容所のような高い塀に囲まれて、近づくものはない。この塀が造られたのは、もう百年近く前、最初の部隊が呪木の伐採に失敗してから一年ほど後のことだ。

青空を奪った憎き呪木を切り倒そうと、意気揚々、若き兵士たちがエルハー山の頂に向かったが、部隊はほぼ全滅で、生き残って街に戻った者もまもなく息を引き取った。そればかりでなく、部隊に参加した兵士の家族や恋人まで後を追うように、命を失ったのである。

彼らのその、あまりに不可解で恐ろしい最後に、人々は呪木の呪いだと噂した。呪木という呼び名は、その頃に付けられたものである。

以後、数度に及ぶ部隊の投入で、いくつかがことが判明した。まず、呪木を切ると、自身の体に切られる痛みが伴うということ。そして、呪いは木を傷つけた者と、その人物が心から大切に思う者に及び、命を奪うということだった。

それらが判明してからは、呪木を切ろうと考えるものはなく、長い時間だけが陰鬱いんうつと過ぎていったのである。

ところが一年前、ある貴族が志願者を募って部隊を編成、呪木の伐採に向かったのだ。結果は今までと同じ、部隊は全滅し、残された家族たちが呪いに侵された。しかし今までと異なつたのは、「呪いが伝染する」という風評が流れたことだった。最初は嫌がらせに始まり、やがて暴動にまで発展しかけた騒動を収める方法はただ一つしかない。

この時点でまだ生きていた家族たちは、本来立ち入りを禁じるために造られた塀の向こうに、隔離された。

アルマーナフは、高い塀を見上げていた。この塀は、夢と現実を隔てるものだ……彼はそう思う。善を成そうとした者が、悪を成さない者に追われたのだ。その言葉以上に、両者の違いは大きい。

「遅いぞ、ロード」

近づく足音に、振り向きもせずアルマーナフは言った。金髪の男は苦笑する。

「悪い。警邏隊けいらたいの様子を探ってたんだ」

「ここには来ないさ」

二人は塀に付けられた、高さ一メートルにも満たない鉄の扉を開けて中に入る。この扉は非常口として造られたものだが、呪われた家族を隔離した時に開けられないよう嚴重に施錠された。それを解錠し、自分たちだけが使えるように鍵を付け替えたのがアルマーナフだった。

この塀の中までは、警邏隊も追っては来られない。呪いを恐れて近づく者もないため、彼らが隠れるにはうつつの場所なのだ。

エルハー山の麓に近い湖周辺は、別荘を利用して隔離された人々が生活している。二人はそこは反対の、森の奥にある洞窟で暮らしていた。

アルマーナフは川で汲んできた水で返り血を洗い流し、ロアードは盗んできた金貨を数える。ほとんど会話もなく、それぞれ思い思いに過ごし、やがて明け方近くに眠る。お互い、名前以外のことは知らないし、知ろうとも思わなかった。

静かな寝息だけが聞こえる中、ロアードがむくりと起き出した。小さくなった焚き火の炎を挟んで眠る、アルマーナフを見る。背中を向けている彼に、ロアードは足を忍ばせて近寄った。途中、壁に掛けてあった銃を取る。

銃口は心臓を狙い、ロアードは引き金を引いた。瞬間、眠っていたはずのアルマーナフは地面を転がり、側に置いていた刀を手にする。二発目の銃弾は肩をかすめ、足払いでよろめいたロアードが放った三発目は、飛びかかろうとしたアルマーナフの右太ももを貫く。倒れたロアードに馬乗りになったアルマーナフは、彼の銃を持つ右手を切断し、そのまま刀を喉元に添えた。

「何が目的だ？」
アルマーナフが尋ねると、痛みに顔を歪めながらロアードは答えた。

「取引をした。警邏隊は、お前の首がどうしても欲しいらしい……」
「そうか。だが、残念だ」

彼が刀を持つ手に力を込めようとした瞬間、ロアードは左手に仕込んだナイフをアルマーナフの右腕に突き立てた。

「お前も終わりだ」

一瞬身を引いたアルマーナフは、その言葉が終わると同時に彼の喉を切り裂いた。吹き出す血を顔に浴びながら、ゆっくりと立ち上がるアルマーナフは、しかし急に足下をふらつかせて、壁に手を付いて体を支えた。

「くそつ、毒か」

よろめきながら洞窟を出たアルマーナフは、霞む視界の中を進んで行く。夜が明けたとはいえ、森の中ということもあり夜のように暗い。意識も朦朧とし始め、勝手に動く足に、自分が何処へ進んで

いるのかもわからなかった。

第二話 霞

輪郭を失った世界は色を滲ませ、朦朧もろうとしたアルマーナフの意識の中で揺らめいていた。張り付いたように握られた刀はそのまま、枯葉を踏んでどれほど歩いただろうか。蛍のような光が残像を引きずって視界を横切り、彼は導かれるように体を倒した。堆積した腐葉土に身を横たえ、まぶた瞼が重く垂れ下がる。

現実感が喪失する中で、アルマーナフは泣きじゃくる幼い自分の姿を見た。あんな風に感情を溢れさせたのは、いつの頃だろうか……浮かんだ疑問は、すぐに気怠さに消えた。

しかし、彼の本能に近い部分が人の気配を察した瞬間、獲物を捕るバネ仕掛けのように、アルマーナフの体は動いた。彼に触れようとしたその人物の胸ぐらを掴み、刀を喉元に押し当てる。

柔らかな、甘い匂いに、一瞬、彼は怯んだ。

「何も、しませんよ」

諭すような口調の優しいその人物は、長い髪を束ねた若い女性だった。吸い込まれそうな漆黒の瞳に見つめられ、アルマーナフは魔法でも掛けられたように刀を降ろし、そのまま、意識を失った。

肩を軽く揺すられて、サリアは目を覚ました。

「もうすぐ朝食の時間ですよ」

目をこすりながら顔を上げたサリアを、白髪の老齢な男性が柔らかな表情で見下ろしていた。彼女ははにかみ、薄紅色に染まった顔を隠すように視線をベッドに向ける。

部屋の半分近い面積を占めるベッドには、アルマーナフが静かな寝息を立てて横たわっていた。

「呼吸も穏やかになってきました。もう、大丈夫でしょうか？」

男性は頷き、ベッド脇の椅子から立ち上がったサリアと入れ替わ

るように腰掛け、アルマーナフの額に手を当てた。

「……熱もないようですし、毒の方は問題ないでしょう。足の怪我も、数日で癒えると思いますよ。目を覚ましたら何か食べさせた方が良いでしょうね」

「わかりました、神父様」

軽く頭を下げたサリアは部屋を出ると、洗面所に向かった。そこは床板が張られておらず地面がむき出しで、専用の井戸がある。彼女は用を足し、手押しポンプで木桶に水を貯めると顔を洗った。棚に置いて置いてあったタオルで顔を拭き、端が欠けた鏡を見ながら長い髪を束ねつつ自分の顔を一通り確認して頷くと洗面所を後にした。

廊下を進んで小さな礼拝堂に行き、そこにある羽衣をまとった神像の前で膝を付き祈りを捧げる。数分ほどそうしてから、サリアは外に出た。空にはいつもの灰色の雲が重くぶら下がり、さわやかな朝というわけにはいかなかった。

彼女が出てきたのは、湖畔に建つ小さな教会だ。木々に囲まれたこの周辺に、他の建物はない。曲がりくねった小道を進むと、拓ひらけた場所に出る。元は貴族の別荘地だけあって、建ち並ぶ建物は豪華だ。

サリアが来た道から扇状に広場があり、中央には水の出ない噴水があった。その噴水に登って遊んでいた子供たちが彼女の姿を見つけて、走り寄って来る。

「サリアお姉ちゃん！」

両手を広げて元気に抱きついてきたのは、五歳の少女エリーナと三歳の妹ラナだ。

「おはよう、サリアお姉ちゃん！」

「はよ〜」

無邪気な笑顔でサリアを見上げて、姉妹は朝のあいさつをする。彼女は二人の頭を優しく撫でながら、

「おはよう、エリーナ、ラナ」

そして姉妹の後ろでニツと笑っている少年に視線を向けた。

「エルリッドもおはよう」

「おはよう。夕べも教会に泊まったんだな」

少年が言うと、少しだけ不安そうな顔でエリーナが尋ねた。

「死んじやうの？」

「バカだな！ だから神父様やお姉ちゃんが看病してるんだろ！」

怒ったようにエルリッドが声を上げると、エリーナは頬を膨らませた。

「バカじゃないもん！ 心配なだけだもん！」

この二人の口喧嘩はいつものことで、些細なことで言い合いになるが、仲直りも早かった。サリアは慈愛の目で二人を見つめ、小さな頭に手を置いて優しく言う。

「大丈夫よ。すぐに元気になるから」

その時、服を引つ張られ、サリアは視線をさらに落とした。ラナが彼女にスカートをぎゅっと握って小さく首を傾げている。

「ポンポも、元気？」

舌足らずな口調でラナが言うと、サリアはしゃがみこんで愛おしくて仕方がないようにぎゅっと彼女を抱きしめた。少女の言う『ポンポ』とはタンポポのことだ。

「うん。もうお怪我也治って、小さな体を懸命に伸ばそうとしているわよ。後で、植え替えてあげましょうね」

「何の話だよ？」

不思議そうなエルリッドに、バカ呼ばわりされた仕返しとばかりに、エリーナはクスクスと笑った。

「女のヒミツよ」

胸を反らせるエリーナに、今度はエルリッドが頬を膨らませた。

サリアは笑って、

「後でちゃんと教えてあげる」

そう言い、手を振って自宅に戻った。

彼女の自宅は、広場から少し入った離れた所にある。白く、大き

な別荘だ。ここにサリアは、母のフィオーネと二人で住んでいた。サリアはキッチンに行き、野菜スープとバターを塗ったパンをトレイに乗せて、二階の母の部屋に向かう。

「お母様？」

ドアをノックして呼びかけたが、返事はない。仕方なく、もう一度ノックしてからそつとドアを開けた。

フィオーネは窓辺の椅子に腰掛け、まるで魂が抜けてしまったかのように外を見ていた。疲れ切り、やつれた顔をしている。元気ならば美しい女性なのだろうが、サリアとは似ていなかった。

二人に血の繋がりは無い。フィオーネは後妻なのだ。サリアの本当の母は、彼女が幼い頃に病気で亡くなっている。しかしお互いにわだかまりはなく、かつては本当の母娘のように仲が良かったのだ。「お母様、朝食を持って来ました」

サリアが呼びかけるが、いらえはない。最近のフィオーネは突然怒り出すか、こうして抜け殻のように外を眺めているかだった。サリアは掛ける言葉が見つからないまま、そつと部屋を出た。自分の言葉が、母を苛つかせるのはわかっていた。

あの時、越えることの出来ない壁が二人の間に出来てしまったのである。

「お父様……どうして……」

常に優しく、明るい笑顔を浮かべていたサリアの顔が、苦しげに歪んだ。

子供の泣く声が聞こえた。耳障りなその声に、アルマーナフは苛立った。けれど視界は闇に閉ざされ、その声がどこから聞こえるのかもよくわからない。耳に集る蚊のように、ただ、鬱陶しく思えた。いったい何を泣いているのか、親は何をしているのか……そう考えたとたん、アルマーナフはその子供が自分だと気付いた。親が死んだから泣いているのだ。

ようやく歩けるようになったばかりの、幼い彼の膝丈くらいまで草が伸びた、何も無い原っぱだった。鳥肌が立つほどの気温の中、アルマーナフは何も身につけていない。

人間として大切なものを、すべて失ってしまった。震え、身を抱えてうずくまる彼を助けるものはない。

アルマーナフは、一人で生きようと決めた。一人で生き、そして奪おう。渇く喉を潤すように、渴望する怨念を満たすべく、呪われた世界ですべてを奪おう。

人の心を捨て、幼いアルマーナフは歩き出した。

第三話 覚醒

肌を刺す冷気で気がつかなかったが、ふと見ると、アルマーナフ少年の全身は小さな切り傷が無数にあった。特にひどいのは、膝から下の辺りである。それまでわからなかったが、傷があることを知ると、とたんに痛み出した。ひとつひとつの傷が存在を誇示するように、チクチクとアルマーナフを刺激する。

なんだかとても悲しくなって、アルマーナフは歩くのを止めた。もちろんずっと悲しかったのだが、抑えきれない感情が涙になって溢れ出す。声を殺し、うずくまって、小さな体を震わせた。

どうして世界はこれほど、絶望に満ちているのだろうか。少年の小さな胸は押し潰され、目に映るすべてが憎悪の対象だった。でも、何かが優しく彼の頭を撫でる気がした。それは母の手に似ている。

生まれる前の姿のように膝を抱え、アルマーナフは温もりに心をゆだねた。こんな想いは、とても久しぶりだった。

ゆるゆるとぬるま湯の中で身をよじるように寝返りをうつアルマーナフは、鼻から吸い込んだ冷たい空気に追いついて立てられるように瞼を上げる。誰も座っていない椅子が見え、天井から吊されたランプのオレンジ色の明かりで、床に出来た影が揺れていた。ぼんやりとした頭を押さえながら、アルマーナフは上半身を起こす。

部屋の中を見渡すが、見覚えはない。時々痛む頭を働かせ、彼は自分の身に起こった出来事を思い出していた。ふと向けた視線の先には、テーブルの上に乗った刃渡り三十センチもの刀があった。

鮮明に蘇る光景は、手に残る生々しい感触をも蘇らせた。人を殺すことには馴れている。何度も感じた、痺れるような感覚だ。渴く気持ちを満たすように、次から次へと屍を築いてきた。それなのに、今はとても気持ちが悪い。ひどくはなかつたが、チリチリと胃液が

込み上げるのがわかる。口の中が、渴いていた。

水が飲みたい。アルマーナフはベッドから降りて、まだおぼつかない足取りでドアに取り付く。人の気配はない。ここが何処なのかは、察しが付いていた。塀の外でないなら、考えられる場所は一つしかない。

体重を掛けながらドアを開け、左右へ続く廊下を覗く。裸足で、足音を立てないように壁伝いで右側に進む。すぐに土間の洗面所に出て、すがりつくように井戸へ駆け寄り、座り込んだ。釣瓶を落とし、腕の力だけで縄を引く。普通なら何でもない作業が、思うように動かない体のせいで異常に重く感じられた。

時間を掛け、ようやく水を蓄えた釣瓶を持ち上げて、アルマーナフは直接口を付けて服が濡れるのも気にせず、喉を鳴らして水を飲んだ。文字通り浴びるように水を飲み干した彼は、しばらくぐったりとしたまま動かない。

時間の感覚がすっかり麻痺しているようで、どれほどそうしていたのかもわからない。アルマーナフはゼンマイを巻き忘れたおもちゃのように、ぎこちない動作で立ち上がると壁に手をつけて、来たときのように歩いてゆく。しかし部屋の前は通り過ぎて、光が差す方へ向かう。

物音が聞こえた。誰かが居るようだ。警戒しながらそっと覗くとそこは礼拝堂のようだった。白髪の老齢な男性が神像を磨いているのが見えた。外へ出るのは、礼拝堂を抜けるしかない。脳裏に、目を覚ました部屋の刀がよぎる。助けてくれたからといって自分に敵意がないとは言い切れない。刀を取りに戻ろうか、逡巡する。

白髪の老齢な男性は、そんなアルマーナフの思いに気付いたわけでもないだろうが、礼拝堂の奥の部屋に入ってしまった。ガタガタと大きな物を動かすような音が聞こえる。

アルマーナフは音が聞こえる暗闇の方へ視線を向けたまま、出来るだけ素早く出口のドアまで移動すると、ドアをわずかだけ開き、隙間から外を確認して身を滑りこませた。

建物の中よりも数度低い空気に、アルマーナフは体を震わせる。それまで気にしていなかったが、着替えさせられた寝間着は生地が薄い上に、さきほど濡らしてしまったのだ。一瞬迷った彼は、道なりに歩き出す。おぼつかなかった足取りも、徐々にしつかりと大地を踏みしめるようになった。

やがて、木々の間から豪華な建物の姿が見え始め、葉の擦れる音に混じって子供の声が聞こえてきた。扉の内側に閉じこめられた呪われし人々。彼らの存在は知っているが、どれほどの人数が残っているのかは知らない。ただ、志願者の家族や恋人ということ、女子供がほとんどだと聞いている。大人の男がいても、さきほどのような老人くらいだろうとアルマーナフは思った。

幹に身を隠し、様子を伺う。拓けた場所は広場になっているらしく、中央に噴水が見えた。噴水はずいぶん長いこと水を吹き出していないのが、遠目で見てもすぐにわかった。その噴水の周りで、子供が遊んでいる。数は三人。大人の姿は少し離れた所に二人見えた。籠を持って立ち話をする女性たちだ。

二人の女性は、時々、子供の方へ視線を送っている。アルマーナフはあの二人が、噴水の所で遊んでいる子供たちの母親だと直感した。一人はほつそりとした、まだかなり若い感じの女性だ。もう一人は浅黒く小太りでがっしりとした、母親然とした女性である。

他に人の姿はない。アルマーナフは、ぼんやりとその光景を眺めた。どうしてか、胸が痛かった。吐き気とは違う、別の気持ち悪さがある。込み上げる衝動が、拳を震わせた。

破壊、殺戮……彼が貴族に対して感じている憎悪の矛先が、目前の親子に向けられていた。自分の意志とは関係なく呪われ、隔離された哀れな人々を、アルマーナフは消し去りたいと願ってしまった。そんな自分の想いに、本人が一番戸惑っていた。

(それは違う)

彼は、何でも自分の思い通りになると信じている、傲慢な貴族が憎かった。父や母を、暇つぶしに殺し、彼から人間としてのすべて

を奪った貴族こそが、憎むべき世界の象徴だったはずだ。貧しい人々は愚かであったが、だからこそ彼にとっては殺す価値など無い存在だった。

頭が痛かった。腕が、足が痛かった。立っているのが辛い。軽いめまいによるめいたアルマーナフは、なんとか体を幹で支えた。落とした視線が、その姿を捉える。

幼い、女の子だった。彼は知らなかったが、その子はラナだった。ラナは無垢な瞳で彼を見上げ、少しだけ首を傾いだ。見れば、他の二人の子供と母親らしい女性たちも、彼の存在に気付いていた。

内心で舌打ちをしたアルマーナフは、溢れる衝動にすべてを委ねてしまおうかと考えた。手を伸ばせば、ラナを抱き上げることが出来る。素手でも命を奪うのは容易い。

母親たちの目に映る恐怖が、いつもなら心地好いはずだった。命を奪うのが楽しいのだ。しかし、ラナの澄んだ瞳に映る自分の姿は、どうしてそんなに悲しそうなのか。

不意に、ラナが彼の寝間着のズボンを掴んだ。

「だいじょうぶ？」

どうして、この少女は逃げないのだろうか。だいじょうぶ？ どうしてそんなことを聞くのか。アルマーナフは手を伸ばす。空気が張りつめるのがわかった。そっとラナの頭に手を乗せ、彼は笑おうとした。でも、笑えなかった。

悲しかった。膝が折れ、アルマーナフはその場に倒れた。

無様な姿を見せるのは嫌だった。けれど、涙を見せるよりはマシかも知れない。そう思い直して、アルマーナフは濁流のような意識に身を任せた。

とても、お腹が空いていた。

第四話 神父

皆から『神父様』と呼ばれている、白髪の老齡な男性はオルネアと名乗った。

「何かに夢中になると、周りが見えなくなってしまうんですよ。いつ出て行かれたのか、まったく気付きませんでした」

「恥ずかしそうにそう言い、アルマーナフに肩を貸してベッドまで運んだ。彼が出て行くと、入れ替わって長い髪を束ねた女性がやって来た。服装は安物のシャツにスカートという、街中でよく見る格好だったが、大きな目には凜とした強い意志を宿し、柔らかく笑みを浮かべる口元には品を感じられた。アルマーナフがこれまで出会った多くの貴族よりも、ずっと貴族らしい気がした。だが、嫌な感じはしない。彼女は、サリアと名乗った。」

アルマーナフは彼女が運んだ野菜スープを飲みながら、助けられた時のことを聞いた。

「タンポポを探しに、森の方へ足を運んだんです」

「どうしてタンポポを探しているのか尋ねると、サリアは慈しむように目を細める。「どんな環境でも負けない強さを持っているのに、控えめな小さく黄色い花を咲かせるところが好きなんです」と、嬉しそうに話した。子供たちに見せたいと思って朝早くから、いつもは近付かない森の奥に向かった。そこで、怪我をして倒れているアルマーナフを見つけたのだ。」

「彼が平和的な人物ではないのは、出会ってすぐにわかった。殺されかけたサリアは笑ったが、アルマーナフには記憶がない。」

「すぐに神父　オルネアが呼ばれて、二人で彼を教会のこの部屋に運んだのだという。その後、洞窟で別の男性の遺体も発見したが、サリアは何があったのか追求することもなく、淡々とその事実だけを告げた。」

「聞かないのか？」

彼が尋ねてみると、サリアは首を振った。

「私は警邏隊けいちうたいじゃないから。それに知ったとしても、どうすることも出来ない」

起こってしまった出来事は、ただ事実としてそこにあるだけだ。

ここに隔離された時、サリアは知ったのだという。「なぜ？」、「どうして？」という追求は、自身を追いつめるだけだ。

限られた命だからこそ、笑っていたかった。

走り回りながらはしゃいだ声を上げる子供たちを窓越しに眺めながら、メリルとコルダはオルネアを交えて朝食を取っていた。メリルは幼い姉妹エリーナとラナの母親で、コルダはやんちゃな少年エリッドの母親だった。

今ここに居るのは彼女たち親子に神父オルネア、そしてサリア親子のわずか八名ばかりである。

メリルは三十歳だったが外見は若く、娘たちと歩いても年の離れた姉妹と思われるほど童顔だった。コルダの方は三十五歳で少し小太りの、貫禄があつていかにも母親然としていた。

「サリアちゃん一人で、大丈夫かしら？」

心配そうにメリルが言うと、同意するようにコルダが頷く。

「子供たちは『悪い人じゃない』なんて言っているけどさ、何か言えないようなことでもなければ、わざわざ塀のこっちに住んだりはしないだろう？」

オルネアやサリアは、アルマーナフを発見した経緯などを大雑把にしか説明していない。余計な不安を与えたくはないという理由で、洞窟で発見された遺体のことなども伏せていた。だがそれでも、普通に考えれば察しが付く。

「彼がまあ、法律を遵守じゆんしゆする人物でないのは確かですが、『悪い人かどうかは判断できません。善か悪かで言うなら、きっと私たちも同じなのかも知れませんかね」

その言葉に、メリルとコルダは顔を見合わせた。その目に映る痛みは、ここにいるすべての人が背負わなければならぬ痛みだった。「それに子供というのは、とても素直にその人物を見ることが出来ます。だから彼らの言う言葉は、正しいものだと思えますよ」場の空気を和ませるように、オルネアは笑った。硬かった二人の表情も、ほっとしたように和らいだ。

食事を終え、メリルとコルダは談笑しながら後片付けをしていた。その様子を眺めていたオルネアは、不思議な想いに駆られる。

皆から『神父様』と呼ばれているが、彼は本当の神父ではない。塀の外にいた頃は、行商を営んでいた。街でしか手に入らないものを田舎で売り、山の幸を漁村へ、海の幸を農村へ運ぶ。彼が扱うものは粗末なものが多かったが、その分、価格を抑えることで貧しい人々からは重宝がられていた。

妻と息子に会えるのは、年に一度、時には数年もの間旅をしていることもあった。だから妻が亡くなったことを、彼はずっと知らずにいた。誰もいない家に帰った時に、近所の人から聞かされたのである。

息子は姿を消した。父を恨み、家を出たのだ。オルネアは仕方がないと思った。何もしてあげられなかった自分を、何度も責めた。気を紛らわせるように、これまで以上に働いた。

胸が締め付けられるような痛みに襲われたのは、それからしばらくしてからだった。言葉に出来ない悲しみに、涙が溢れた。それが『呪われた瞬間』だと知ったのは、ここに隔離された後だった。ここに集められた人々は皆、同じような体験をしていたのである。

絶望の声の中で、オルネアは喜びの涙を流した。父を恨み家を出た息子の本心が、『呪い』となって自分を襲ったのだ。心から大切に思う者にだけ及ぶ呪いである。

これは父親として何も出来なかった自分への罰であり、父親とし

て息子の為にしてやれる唯一のことでもあった。

多くの者が次々に亡くなり、次は自分ではないかという恐怖の日々は確かに辛いものであった。しかし、塀の外ではなかった落ち着き、安らかな日々がここにはあったのである。

メリルとコルダの笑い声に、オルネアは優しく目を細めた。外では子供たちの元気な声が響き、緩やかな時間が平和に過ぎていた。

しかし、突き刺すようなガラスの割れる音がそれを壊す。

「神父様！」

悲鳴のような声は、メリルだ。オルネアは慌てて立ち上がる。彼女の側で、コルダが倒れていたのだ。コルダは白目を剥き、力なく開いた口からはだらしなく舌が覗き、痙攣けいれんしていた。

「発作が……まさか薬を」

オルネアはメリルを見たが、彼女はわからないというように首を振った。

「ともかくベッドに運びましょう」

二人は両側からコルダを抱えて、彼女の部屋まで運んだ。ベッドに寝かせ、すぐさまメリルが部屋を飛び出して行く。オルネアは部屋の中を見渡し、棚の小さな引き出しを開けた。その中から銀色の四角い缶を取り出し、入れられた薬包を確認する。

「やはり飲んではいなかったのですね」

唇を噛み、缶を戻そうとしたその時、突然コルダがオルネアの首に腕を絡めてきた。

「ぐっ……コルダ！」

彼女の目には、理性の光が無かった。それは獣の目だ。低く唸り、歯を剥いて涎よだれを垂れ流している。恐ろしいほどの力で、オルネアの首を絞めていた。引き剥がそうとするが、彼一人の力では無理だった。

そこへ、拘束具を持って戻ったメリルが、慌ててコルダに取り付いた。羽交い締めにして、オルネアから離そうとする。しかし二人の力でも、コルダを押さえることが出来ない。「助けを……」そう

メリルが言いかけた時、不意にコルダの全身が弛緩^{しかん}した。

倒れたコルダの横でオルネアが咳き込みながら、不安の色を浮かべた眼差しで彼女を見つめた。

第五話 孤独

胸の奥で、何かガザワザワと騒いでいた。半分の不安と、半分の恐怖。こんな気持ちになったのは、あの時以来だろうか。アルマーナフは口の中に広がる野菜の甘みを不思議に思いながら、考えていた。

両親を失って何の支えもなかった自分が、あのどうしようもないざわめきに打ち勝つには、怒りの炎を灯すしかなかった。より強く鮮明な感情が、ぼやけたとらえどころのない感情を紛らわせる。それはただ、意識しないでいらただけにすぎない。今感じているざわめきは、あれからずっと続いていた感情なのではないか。まるで取り憑かれたかのようにまとわりつかせていた怒りは、アルマーナフの中から消えたように静かだった。強い光が消えて、ようやく見えるようになった弱い光。それが自分の中にあるものの正体なのかも知れない……アルマーナフはそう思った。

けれど別の自分が、それを否定する。何も知らぬ子供ではない。生きるための術を身につけ、常に自分こそが恐怖の対象だったはずだ。邪魔なものは力づくで排除して来たし、死ぬことも恐ろしいとは思わなかった。少なくとも、彼が殺してきた貴族たちのような醜態を晒す気はなかった。

不安も恐怖も、生まれるはずのない感情だ。ならば、このざわめきは何だろうか。

「……あの」

不意のサリアの声が、アルマーナフの意識を呼び戻す。彼は黙ったまま、顔を彼女に向けた。彼女は少し眉をひそめ、わずかに顔を傾いでから言った。

「あんまり、お口には合いませんか？」

「……いや、大丈夫だ」

面倒そうに答えた彼に、彼女は嬉しそうに笑った。

「よかった。何だか、難しい顔をしていたから」

突然だった。サリアのその顔を見た瞬間、アルマーナフは自分の中にあるものの正体を知った。このざわめきは、かつての残滓^{ざんし}ではない。

暖かなベッドの上で、まだ湯気の昇るスープを口に運ぶ。これほどのんびりと食事をすることは、今までで初めてだった。空腹を満たすだけの食事ではない。味わうことが、許される。仄かな明かりに照らされたサリアの顔は、柔らかく笑みを湛えていた。

これは、このざわめきは、居心地の悪さから来る孤独感だ。アルマーナフは思い知った。自分とはあまりにも違う世界で生きる人々、その中では、自分は孤独なのだ。まるで仲間はずれにされたような、嫌な気持ち。見放されたような、不安。入り交じった様々な想いが、彼の心を騒がせていた。

食事を止めたアルマーナフの手を、サリアが握った。驚いた彼がサリアを見ると、彼女は何だか悲しそうな顔をしていた。

「どうして、そんな顔をしている？」

「あなたがとても、悲しそうだったから」

アルマーナフは内心の動揺を隠すように、乱暴に手を振り払うと、再び食事を始めた。スープの甘みが、まるで心まで甘くしてしまつたような気がした。

「こそこそと話す声が、廊下から聞こえた。」

「やっぱり、邪魔なんじゃないかな」

「最初に来ようって言ったのは、お前だろう」

「だって、心配だったんだもん……あ、ラナ！」

ドアがゆっくりと開いて、幼いラナの顔がひょこつと現れた。

「ふふふ……いらっしやい、ラナ」

ラナはサリアの顔を見ると、ニパツと満面の笑顔を浮かべて走り寄り、彼女の足にぎゅっと抱きついた。サリアは目を細めて幼子の

小さな頭を優しく撫でながら、ドアの外でまだ躊躇ちゆうじゆしている二人にも声を掛けた。

「エリーナとエルリッドも、入ってらっしゃい」

気まずそうに笑いながら入ってきた二人は、正面のアルマーナフに視線を向ける。だがすぐに、エルリッドは少し不機嫌そうに、エリーナは恥ずかしそうに目をそらす。

「わざわざお見舞いに来てくれたのね」

サリアがそう言いながら、アルマーナフを見て笑った。彼は関心がなさそうに顔を背け、呟くように言う。

「俺みたいなお奴と二人きりだから、様子をみに来たただけだろう」

その言葉に他意はなかった。自分が他人にどう見られているかは理解している。危害を加えられるのではないかと、疑われた経験は数え切れない。相手のそうした反応にはもう慣れていたし、そのことで悲観することもなかった。だから、大きな声を上げたエリーナの反応に、アルマーナフは驚いた。

「違うの！ あの」

思わず出た声に、エリーナ自身が驚いて口をつぐむ。そして顔を真っ赤にしてうつむくと、もじもじとした。何かを言いたそうだったが、心にためらいがある。それを察したのか、不機嫌そうな顔でエルリッドが口を開いた。

「母ちゃんが言ってた。外の人間がわざわざ堀の中に来るのは、外には居られない悪さをしたからだって。俺たちだって、それくらいのことはわかるんだ」

「エルリッド！」

エリーナが慌てて少年の腕を引っ張るが、エルリッドは構わずに続けた。

「でも、本当にエリーナやラナはお姉ちゃんが心配で来たわけじゃない。二人が心配だったのは、お前だ。二人は……」

「サリアお姉ちゃん！ そういえばタンポポはどうしたの？」

かなり強引に話題を変えようとサリアに話を振るエリーナだった

が、振られたサリアは驚いて咄嗟とっさに言葉が出ない。すると沈黙を恐れるように、少女はサリアの手を取ると部屋の外へ引つ張った。

「ね、ね、タンポポの様子を見に行きましょう。ラナもおいで」

「あの、エリーナ。どうしたの？」

困惑気味の声とラナの笑う声が、部屋から遠ざかってゆく。後にはエルリッドと動けないアルマーナフだけが残された。相変わらず不機嫌そうな顔のエルリッドは、チラツと視線を廊下に向けたが、すぐにアルマーナフを正面から見据える。

「お前、人を殺したことがあるのか？」

好奇心で尋ねているわけではなさそうだった。眼差しは、真剣である。

「大勢……数え切れないほど殺した。それだけの人生だった」

「それはさ、頼まれたりしてなのか？」

「人に頼まれて殺しはしない」

「そうか……」

考え込むように、エルリッドは視線を落とした。

「殺して欲しい奴がいるのか？」

エルリッドは顔を上げ、黙ったままアルマーナフを見つめた。その目が、肯定している。しかし瞳で輝く光の中に、殺意は感じられなかった。憎悪ではない別の感情が、まだ六歳の少年の心にどんな変化をもたらしただのか。そしてその変化が、いかにして殺人の依頼という大事を決意させたのか。

深い闇の底を何度も覗いたアルマーナフも、少年の心に潜む闇の正体はわからなかった。

「誰を、殺せばいい？」

「……それは」

ためらいながらエルリッドが口を開いたとき、廊下から女性達の声が聞こえて来た。

「他にもあるか、探してみましょう」

「今度は私たちも一緒に行くからね」

「ええ」

笑いながら入ってきた三人に、エルリッドは何事もなかったように話しかけた。

「何の話だよ。どこか行くのか？」

「サリアお姉ちゃんと一緒にね、タンポポを探しに行くのよ」
「いくの？」

ラナも嬉しそうにそう言って笑った。何気ない風景。だが、アルマーナフが逸らした視線の先には、いびつな影が不気味に揺れていた。

第六話 縁（前書き）

サブタイトルの形式を変更しました。

第六話 縁

毎朝、アルマーナフの様子を見に顔を出すのがオルネアの日課になって、数日が過ぎた。その日もいつものように、ベッドでぼーっとしていたアルマーナフの元へ、オルネアがやって来て朝のお祈りに誘った。無言でそれを断る彼に嫌な顔ひとつ見せず、オルネアは一人でお祈りをした。それから少ししてサリアが朝食を持って現れ、いつもと何も変わらない時間がゆっくりと流れた。

アルマーナフはいつも、ベッドの上で過ごす。もう動くことは出来たが、気持ちがそれを拒んでいた。自分は何をしているのか、疑問に思うことはある。怪我が治るまで、そういうつもりだったはずだ。もう、あの洞窟に戻っても一人で平気だった。けれどそれをしてない自分が、アルマーナフは不思議であると同時に不愉快でもあった。

ドアが叩かれてオルネアが現れたのは、そんなわだかまりを胸の奥に抱いている時だった。今日、二度目の来訪。それは初めてのことだ。オルネアは入口の所に立ったまま言った。

「少し、体を動かしませんか？」

無言で視線を向けるアルマーナフに、オルネアは背負い籠を見せた。

「手伝っていたきたいのです」

少し考え、アルマーナフは頷いた。差し出された作業服に着替え、教会を出る。

「こちらです」

いつもとは反対の方向、教会の裏に続く道を進んだ。林の影に隠れて見えなかったが、少し進むと拓けた場所に出た。畑がある。

「作れるものはここで作るようにしています。他のものは、外からいただくのです」

「……外？ 支給か何かか？」

「いえ、昔は気を遣ってか、定期的に食料などを運んでくれましたが、それも最初の数ヶ月ほどです。今は有志の方……サリアさんのお屋敷で働いておられた方々が、こつそりと運んでくださるのです」「やはり、あの女は貴族だったのか」

初めて会った時に感じた、隠しきれない上品さを思い出す。

「だが、どうして貴族がこんな所にいる？」

そう疑問を口にしてから、アルマーナフは気づいた。一年前、【呪木】の伐採に向かう志願者を募ったのは、確か貴族だったはずだ。「サリアの、父親だったのか」

「彼女のお父様は、貴族といってもそれほど豊かではなかったそうです。それでも貧しい人に食料を分け与え、人望の厚い方だったと伺っています。だからこそ、多くの方が志願されたのでしょうか。ここへ食料を運んでくださる方も、恩返しのもりだと、いつだったか話してくださいました。サリアさんとお母様がここへ入れられる直前、屋敷などの財産をすべて売り払い、そのお金を使用人に分け与えたそうです。貴族にしては少ない財産でしたが、贅沢をしなければ十年以上は楽に暮らせるほどの額だと伺いました。彼らはその中から少しずつ出し合い、食料を買って、運んでくださっているのです」

「……恨んではいけないのか？ 彼女の父親を」

「まさか！」

オルネアは驚いたような表情で、何度も首を振った。

「だが、父親が余計なことを言い出さなければ、誰もこんな所に入られることもなかった。もちろん、死ぬこともな」

「結果を見ればそうでしょう。けれど、あの方はすべてを犠牲にしました。ご自分の家族も、財産も、そして自らの命も。しかもお父様のこれまで積み重ねたものがあつたからこそ、今、こうして手に入れることの出来ない食料を外から運んでもらえる。感謝の気持ちがあどれほど溢れようと、責める気など起きようもありません。もつと楽な生き方が出来た方です。初めから何も無い、私たちとは違

う。選択肢があつて、あえてそれを選ばなかつた。自分の身に置き換えれば、その精神の高潔さに頭が下がる思いですよ」

自分だったら、どうだろうか。アルマーナフは、あまり他人と自分を置き換えて考えたことはなかつた。多くの貴族を殺し、憎しみをぶつけてきた。ただ、それだけだ。

もし、自分がサリアの父親と同じ立場にあつたら、どうするだろうか。想像も、つかない。オルネアに呼ばれて歩き出しながら、アルマーナフは戸惑っていた。

トルデスは油で汚れた服を脱ぎ捨て、倒れるようにベッドへ寝ころんだ。いつもはなかなか寝付けない冷たく薄い布団も、今日はなぜか心地好かつた。板の上にタオルを敷いて寝るよりはマシだ。誰もいない、小さな家。少し、眠ろう。トルデスは頭の片隅でそう考え、そのまますぐに寝息をたてはじめた。

良い匂いで目覚めると、外はすっかり暗くなり、妻のリデアが夕食の準備をしていた。

「帰つてたのか」

「死んでるのかと思つたよ。昨日はずいぶん、こき使われたみたいだね」

リデアの口の悪さには馴れていた。トルデスは、彼女の大きな胸とお尻が好きだった。もそもそつとベッドから起き出して、皿を並べる妻を背後から抱きしめた。

「邪魔だよ、まったく」

そう言いながらも、リデアは夫の手を払おうとはしなかつた。

「なあ……」

顔を寄せ、トルデスは言う。

「また行くんだらう？」

「もちろんだよ。もう準備もしてある」

「そろそろ、止めないか？ いい加減、義理は果たしたんじゃない

のか？」

ようやくその手を振り払い、妻は夫を見た。

「旦那様にはどれだけの恩があるんだい？　まだ、サリアお嬢様と奥様が中にいらっしやる。この程度のことです返しきれぬものじゃないだろう。せめて最後まで、自分に出来るささやかなことをしてあげたいんだよ」

リデアの真摯な眼差しに、結局トルデスは頷くしかなかった。

彼にも、同じ思いはある。けれど日々の苦しい生活の中で、不満ばかりが浮かび上がるのだ。抑えても、抑えても浮き上がってくるその思いは、いつしか黒い願望を生み出した。

サリアお嬢様が亡くなれば。

一年も保たないと思ったからこそ、妻の提案を受け入れたのだ。ほんのわずかな我慢のほずだった。分けられた財産を少しづつ使えば、今のきつい仕事を辞めても生活が出来る。妻にももっと楽をさせてあげられる。

しかし、自分には何も出来ない。トルデスは自覚していた。妻の説得が無理なら、自分には何も出来ない。どれほど『あの女』の死を願っても、塀の中では手が出せない。むろん、塀の外にいたとしても、自分は何もできないだろう。

憂鬱うつな気持ちを引きずるように、夕食を済ませたトルデスはいつもの酒場に向かった。これだけが楽しみだった。

酒場に着くと、すでに仲間達が盛り上がっていた。手を挙げて、その輪に加わる。仕事の話、女の話、不満や愚痴を笑いながら話し、トルデスの心は少しだけ平穏を取り戻す。

と、そこへ突然、警邏隊がやってきた。一瞬、酒場は静寂に包まれる。だが、ただ手配書を貼りに来ただけだとわかり、再び笑い声が溢れた。話しを聞きながら、トルデスは視線を新しい手配書に向けた。凶悪そうな二人の人相書きだ。

貴族の屋敷に押し入り、残虐に女子供も容赦なく殺害する凶悪犯。賞金額は、一生、遊んで暮らせそうなほどの額だ。思わず熱心にそ

れを見る自分に、トルデスは苦笑した。

縁はない。こんな田舎に貴族を狙う凶悪犯が来るはずもない。仮に見掛けたとしても、自分が捕らえることなどできるはずもなかった。通報だけでもいくらか貰えるのだろうか。

トルデスは頭を振り、再び話しの輪に加わった。

第七話 罪悪

疑問が浮かばなくなるほど、アルマーナフは同じ事をただ繰り返す毎日を送っていた。そうすることに特別な意味があったわけではない。ただ何も考えず、機械的に繰り返す日常は彼の心に波風をたてない分、静かに馴染んでいったのだろう。

昨日のことを思い出せば、それがそのまま過去一週間分の記憶となるほど、変わらない日々。永遠ではないにせよ、そうした日々が後もう少しだけ続くような予感があった。けれど、未来はいつも不確かで、絶対などない。

いつものように畑仕事を終えたアルマーナフとオルネアの二人を、慌てた様子のメリルが出迎えた。

「コルダさんがまた発作を。今回はすぐに意識を失ったから、サリアちゃんと二人でベッドに寝かせましたけど……」

「やはり、薬は飲まなかったんですね」

オルネアは言いながら、深く溜息を吐いた。

「前回の発作の後、何度かは飲んだようです。でもやっぱり……」
頷いたオルネアは、コルダの家に向かう。メリルも後を追いついて、一人残されたアルマーナフはしばらく二人の入って行った家を見ていた。別にコルダが心配だったわけではない。ただ、何か胸の奥で引っかかっている気がした。

自分だけが輪の中に入れないような、寂しさだろうか。

「莫迦らしい」

強く打ち消すように声に出し、アルマーナフは教会に戻った。

汚れた作業服を脱ぎ、手足と顔を洗い、濡れたタオルで体を拭いてから誰のものかも分からないシャツとズボンを身につける。かつてここで暮らしていた男性の服を、サイズを見てサリアが持ってきたのだ。

すっかり馴染んだベッドに身を投げ、揺れるランプの火を眺める。

変わらない毎日と思っていたが、彼は一つだけ変化するものに気がついた。それは、こうしてランプの火を眺める時の自分の気持ちだ。以前の自分は、揺れる炎は邪悪で、血を求める悪魔の誘いのように感じていた。けれど今は、闇を払い、温もりをくれる心強い味方に思える。それはアルマーナフにとつて、驚嘆すべき変化だろう。目を閉じる。全身に重く掛かる疲労は、しかしどこか心地良かった。

ドアを叩くサリアの声で、アルマーナフは目覚めた。彼女が食事を持って来るのは、畑仕事を終えてからいつも二時間ほど過ぎてからだ。ほんの数分ウトウトしたつもりだったが、ずいぶんと寝ていたらしい。

「入ってもいいですか？」

「ああ……」

いつも通りに二人分の食事を持ってやって来たサリアの後から、オルネアも姿を現した。

「食事の時間にすみません。数分で済むので、少しだけいいですか？」

アルマーナフは頷く。

「作業中にも話しましたが、明日、外から差し入れの荷物が届きます。十キロほど山の方に進むと、壁が崩れている所があるのです。人の来ない森の中ということもあって、誰にも知られなかつたのでしよう。修復されることなく、残っていたのを偶然発見し、利用させていただいているのです。もちろん今は、分からないよう細工はしてあります。そこへ私とサリアさん、コルダの三人で荷物を受け取りに行くつもりでした。ですがコルダは今も昏睡状態で、明日、出かけるのは無理でしょう。メリルは子供達を見ていなければなりませんし、コルダの様子も心配です。荷物の量を考えると二人では無理なので、出来ればあなたに手伝って欲しいのです。いかがです

「よう？」

壁の崩れた所を確認したいと、アルマーナフは思った。彼が使っていた出入り口の他に、別の出入り口があった方が今後の為に役立つだろう。心の中でそう考え、ふと、彼は疑問に思う。

（俺はいつまで、ここに居るつもりだ？）

そしていつか、再びあの血生臭い生活に戻ってゆくのだろうか。ただ、憎しみのまま殺すだけの、終わりの見えない陰惨な毎日。

「どうですか？」

遠くに聞こえるオルネアの声に、アルマーナフは機械的に頷く。笑顔を浮かべて御礼を述べる声は、届かなかった。目の前が暗くなり、足下から崩れ落ちそうな気がした。だが、あの日々はそれほど昔のことだったろうか。

「アルマーナフさん？」

突如、光が差した。顔を上げると、そこには椅子に腰掛けたサリアが居た。

「一人きりの食事は、楽しくないでしょう？」

いつからだったか、彼女はそう言って一緒に食事をするようになった。本当はみんなの所に来てくれると嬉しいんだけど……そう呟いて笑みを浮かべたが、強制するようでもなくそれ以降、何も言わなかった。まだ、十日あまりの日課である。

「今日はシチューです。お肉は入っていませんが、お野菜いっぱいおいしいですよ。アルマーナフさんが取ってきてくれた、ニンジンです」

大きく切ったニンジンを頬張り、サリアは楽しそうに微笑んだ。アルマーナフは目をそらし、自分の食事に取りかかる。狭い部屋に、食事の音だけがやけに大きく聞こえた。何となく耐えきれず、アルマーナフは口を開いた。

「コルダの……様子はどうなんだ？」

「意識はまだ戻りませんが、落ち着いています」

一瞬、驚いたような表情を浮かべたが、すぐに笑顔に戻ってサリ

アは答えた。

「神父が話していた……薬を飲まなかったと。だから、発作が起きたそうだな」

「はい……」

食事の手を休め、サリアは沈んだ声で返事をする。わずかな逡巡の後、意を決したように話し始めた。

「呪いの、発作なんです。呪いは、ただ命を奪うだけではなく、人間としての尊厳すらも奪ってしまう。心を、めちゃくちやに壊してしまうんです。今までも多くの方の最後を見てきましたが、顔を背けずにはいられませんでした。それがいつか自分にも起こることだと知り、自ら命を絶つ方も居たほどです」

「……」

「そんな中、残された人たちの中で薬草などに詳しい方々が、少しでも人間らしい死を迎えられるよう、薬を調合したのです。神経に作用するらしく、定期的に飲むことで意識をハッキリ保つことが出来るようになりました。けれどそこに至るまで、とても多くの犠牲があつたのです……」

苦痛を堪えるような表情で、絞り出すようにサリアは言う。

「人体実験をしました。これは後になって判ったことなのですが、該当者の食事に混ぜて与えたそうです。もちろん、当人は何も知らずにそれを口にしていました。そのせいで、死期を早めた者もいたでしょう。後で思い返せば、今までと様子が違う方がいました。今までは人間らしさを失う代わりに、苦痛を感じることもなく亡くなつていましたが、時折、とても苦しそうに亡くなる方がおられたのです。その方々が、実験台にされた方たちでした」

サリアは唇を噛み、目を閉じる。

「ごく一部の方達が極秘裏に行った実験ですが、完成した薬を捨てることが出来なかつたすべての人間が同罪なのです。人間らしさを取り戻すために、人間として大切なものを失い、踏みじつたその薬は、確かに良く効きました。けれど深い業の報いでしょうか、そ

の薬を飲むと全身に激しい痛みが走るのです。最初は長い期間で時々だったものが、服用を続ける内に間隔が狭まっていききました。結局、痛みに耐えられず服用を中止する者も現れたのです」

「……コルダもか」

「はい。時々は飲んでいるようですが、最近は止めていたようです。アルマーナフは思う。人間らしさとは何なのか。殺戮さつりくを繰り返す、全身を血で真っ赤に染めた自分からは、きつとすでに失われているはずのものだろう。」

第八話 深淵

アルマーナフは眠れずに、何度目かの寝返りを打った。冴えた頭の中には、様々な想いが湧き上がってくるが、どれ一つとして確かな形を保つことは出来ない。

風もなく、いつものように穏やかな夜は、しかし、今までもそれほど静かだっただろうかと疑問を抱かせた。落ち着かない。無理矢理閉じた目を開けて、アルマーナフは灯りの消えたランプを見る。見るとはいつても、部屋の中は濃い闇で満たされており、慣れた目でもその輪郭を捉えることは難しい。

もつとも、この部屋が暗いのは夜だからというだけではない。上の方に明かり取りの小さな丸窓があるが、昼間でも暗雲に覆われたこの世界では、小さな窓はさほど役目を果たしてはいない。それでも洞窟で寝ていた彼には、十分過ぎた。

ぼんやりとしたランプを視界の中心に置き、アルマーナフは特に思考を巡らせるでもなく、家の軋む音や正体の知れぬ音を聞く。不思議なもので、火を点すと恐ろしく感じる闇も、こうして身を浸し、耳を澄ますとどこか暖かみを感じさせてくれる。それは、ずっと昔の、まだ母の胎内にいた頃の懐かしい記憶なのだろうか。

アルマーナフは心の中で首を振る。すべては人の心次第でしかない。理由はいつも後付なのだ。もし安らぎを感じるのだとしたら、それは自分の心が変化したに過ぎない。それは、良いことなのだろうか。良いことだと、信じたかった。

ウトウトとし始めた頭は、物音で覚醒した。小さな足音は、やがてアルマーナフの部屋の前で止まった。迷うようなわずかな間の後、控えめにドアが叩かれる。

「誰だ」

問いかけると、ドアが開いて小さな灯りとともに少年の顔が覗く。エルリッドだ。険しい表情に、爛々とした目でじつとアルマーナフを見ながら、そつと部屋の中に身を滑り込ませて来た。まだ六歳の子供とは思えぬ悲壮感を背負い、しかし強い意志を漲みなぎらせている。

「この前のこと……」

言い淀み、うつむく。しかしすぐに顔を上げて、アルマーナフを正面から見た。エルリッドの持つランプの、心細い灯りの中で互いの視線が絡み合った。

「殺して欲しいんだ」

「誰を？」

鼓動が早くなるのを感じながら、エルリッドは一瞬の迷いを見せる。幼い彼にも、わかっていたのだ。たとえそれがどんな理由で発したのだとしても、決して消えることはない。赤黒い染みとなって心の中にいつまでも残り続けるのだ。それを今、自分は言おうとしている。

「……母ちゃん。母ちゃんを、殺して欲しいんだ」

震えた。心も体も、震えた。拳をきつく握る。

「居なく、なる……。母ちゃんが、居なくなる。このままじゃ、母ちゃんは母ちゃんじゃなくなるんだ。それにすごく苦しそうだ。俺、俺」

涙が、エルリッドの瞳を濡らす。父が亡くなってから、彼が初めて見せる涙だった。あの時、途方に暮れる母を見ながら、もう絶対に泣かないと決めていた。それが、どんな言葉も掛けてあげられなかった少年の後悔であり、決意であったのだ。けれど、溢れ出る感情を抑えつけるには、エルリッドは幼すぎた。

泣きながらも逸らすことなく向けられた目に、深い、深い闇が映っている。

アルマーナフは、サリアの言葉を思い出した。心を壊す呪い……人間らしさを失い、大人ですら耐えられないほどの恐怖とおぞましさ。それを、この少年も見て来たのだらう。

母ちゃんが居なくなる。

エルリッドの大好きな、優しい母の姿。それが壊れてゆく。少年が何よりも恐れるのは、その事なのだ。しかしと、アルマーナフは思う。

「母が壊れるのを見たくはない。だから殺してくれ。そしてお前は救われる。お前だけが、救われる」

「そんなんじゃない！ そんな……俺は、母ちゃんを助けたくて」「助けたくて殺す。だが、本当に母親は救われるのか？ それに殺すのは俺だ。大勢殺しているんだから、もう一人くらい平気で殺せるだろうと、そう思ったのか？」

「違う、違う！ 俺、そんなんじゃない……俺……」

そう、違う。自分は、平気で人を殺せる男だったはずだ。アルマーナフは、自分がなぜそんなことを言ったのかわからなかった。彼は、怒っていたのだ。しかし怒っていることも、なぜ怒っているのかも気付いていない。

「ごめんなさい……俺、そんなつもりじゃ」

少年の持つ灯りが揺れていた。アルマーナフは唇を噛む。

「帰れ」

「ごめんなさい」

何度も頭を下げながらエルリッドは部屋を出て、そのまま駆け出した。遠ざかる足音を聞きながら、アルマーナフは拳を握り、壁を殴りつける。

「クソッ！」

胸が痛んだ。命乞いをする子供を殺す時も、泣きじゃくる子供を殺す時も感じなかった感情が、アルマーナフの胸に湧き上がった。それが彼を不愉快にさせる。

苛つく思いを抱き、アルマーナフは部屋を飛び出した。

窓からそっと、忍び込んだ。ベッドの上で、コルダは静かに眠っ

ている。

人を殺すのは容易い。眠っているなら、なおさらだった。胸にナイフを突き立てれば、それで済む。寝ているうちに殺されるのは、まだ幸せな方だろう。殺されたことも気付かず、眠り続けることが出来る。

若い息子が殺してくれと頼んだことを知ったなら、母親はどうするだろうか。

アルマーナフは、コルダを見下ろした。暴れないように、手足が拘束されていた。今なら、絞殺も可能だった。手を伸ばせば、すぐに実行出来る。

エルリッドとコルダの親子は、本当に救われるのか。それで良かったと思えるのか。

アルマーナフは、自分の手を見た。うっすらと汗をかいている。緊張している自分が、あまりにも滑稽だった。

「んっ……」

その時、コルダが目を覚ました。暗闇で何も見えなかったが、そばに立つ気配は感じられたようだ。

「誰だい？ 居るんだろう」

呼びかけるが、彼女にはそれが誰なのか何となくわかっていた。彼女のよく知る人物たちとは違う、鋭い刃物のような気配。

「あたしを殺しに来たんだろう？」

「……なぜ、そう思う」

「自分の身に何が起きたのかくらい、わかっているよ。さんざん、見てきたんだ。記憶がないのが、救いだろうね。覚えてでもいたら、今以上にたまらない気持ちになる。醜く、無様だ」

「……」

「メルルじゃない。サリアちゃんか、神父様か。いずれにしても、迷惑をたくさん掛けただろうね」

「もし、誰かが俺にお前を殺して欲しいと頼んだのだとしたら、そいつを恨むのか？」

「まさか！　それが一番だと思うなら、きつとそうするべきなんだ。あたしでも、そうしたかも知れない。せめて人間らしく死なせてやりたいじゃないか。こんな所に閉じこめられて、いつ死ぬのかと怯える毎日で、それだけが救いなんだよ」

「……俺に殺されて、それで救われるのか？　本当に？」

「いつも思うんだよ。あたしが正気を失って、誰かを殺すんじゃないかってね。それが誰であつても許されはしないだろうけどさ、もし、あの子を　エルリッドをこの手に掛けてしまったら、あたしは母親として一番の罪と絶望を抱いたまま死ななきゃならない。それが、何よりも怖い。そのくせ、自殺する勇気もないんだから、本当に駄目だねえ」

自嘲する声を背に受け、アルマーナフは窓を開けた。

「殺さないのかい？　ねえ、お願いだよ。もしあたしがエルリッドを殺しそうになったら、その時は　」

アルマーナフは耳を塞ぐように外に出て、窓を閉ざす。最後の言葉は途切れ、聞こえなかった。

第九話 善意

荷車を牽^ひき、アルマーナフは先導するオルネアの後を歩いていった。サリアはオルネアと並び、たわいもない話をしつつ、時折、氣遣うように後ろを振り返る。

最初はオルネアが今まで通り自分が荷車を牽くと主張していたが、アルマーナフが無言でその役目を買って出た。それから黙々と、歩き続けている。

何か他意があつて、役目を買って出たわけではない。この程度は、些細な事だと思っただけだった。恩返しというほど大層な事ではなかったし、恩を着せるほど立派な事でもない。他意を持つことすらはばかられるような、そんな行為だと感じた。だから何も考えず、顔ぶれを見て自分がすべきことだと直感のまま、行動に移したにすぎない。

やがて、道も半分ほど進んだ頃だろうか。森の一角が拓かれ、土を盛り棒を差した、墓のようなものが無数にある場所が見えてきた。アルマーナフが尋ねるよりも先に、オルネアが足を止めて言った。

「塀のこちら側で亡くなった方は、火葬にして遺骨をあそこへ埋めました。塀の外の人たちは私たちの火葬の煙を嫌がりますので、この辺りまで運ばなければいけなかったのです。この辺りは、人が住んでいませんから」

「火葬にする必要はなかったんじゃないのか？」

アルマーナフが聞くと、今度はサリアが答えた。

「病気が心配されたのです。それに、わずかとはいえ狼の姿が目撃もされていたので、集まってきて掘り返されたりするのも防ぎたかったから」

「風のない日は、火葬の煙がまっすぐと空に昇るんです。そしてあの灰色の雲に溶けてゆく。まるで、死んでもなお【呪木】に囚われているような、そんな悲しい気持ちになりました」

そう言ったオルネアの手を、サリアは優しく両手で握る。

「神父様、いつかきつと人々は青空を取り戻すことが出来ます。かつての世界に広がっていた、青く澄んだ空。聞いた話だと、空が水面に映って湖なども青く輝くそうです。色とりどりの花が咲き、鳥がさえずる、そんな世界がやがて訪れます。私たちは生きていないでしょうが、多くの犠牲は決して無駄にはならないはずですよ」

「そうなら、嬉しいことですね」

本当に嬉しそうに微笑むオルネアとサリアを見て、アルマーナフは取り残されたような気持ちに襲われた。自分の存在しない死んだ後の世界など、どうでも良かったからだ。夢も希望も、自身にとつて望み叶えるものだ。アルマーナフは思っている。だから人は他人を傷つけ、犠牲を積み上げて生き続けるのだ。

自分には見えない、感じるものの出来ないものを知る二人が、アルマーナフは何だか遠い存在のように思えてならなかった。

「……行こう」

墓場は好きではない。人の死も、そこからもたらされる悲しみも、眩しすぎる幻想も好きではない。居心地の悪さから逃げるように、アルマーナフはオルネアとサリアを急かし、再び歩き出した。

一見してそこは、積み上げた石の壁と絡み合う蔦によって遮られ、進むことは出来ないように思えた。しかし蔦によって隠れた石の壁は、緻密に描かれた絵に過ぎないことを、近寄って見てアルマーナフは気付いた。

「父が懇意にしていた画家に頼んで、描いていただいたのです」

サリアが笑って言う。オルネアと二人で絵をずらすと、人が一人通れるほどの穴が現れた。穴の向こう側も絵で蓋がされているように、オルネアが二回連続で蓋を叩き、それを三度繰り返すと向こう側の絵も外されて女性が顔を覗かせた。

「神父様」

女性の呼びかけに頷き、オルネアが下がるとサリアが穴に入っていく。

「リデアさん、それにトルデスさん。来てくださって、本当にありがとうございます」

穴を抜けて外に出たサリアは、荷物を運んできた夫婦に深く頭を下げた。

「どうか頭をお上げください、サリアお嬢様！ 私たちは当然のこととしているだけです」

感激した様子でリデアはサリアの手を取り、堀の向こうで誰かが生きている限り、何度でも足を運ぶことを約束した。それを横で聞いていたトルデスは、わずかに眉をひそめる。余計なことを言うな、と思うが口には出せない。

「荷物を運ぼう」

代わりにそう言って、トルデスは運んできた荷物を降ろし始める。穴からオルネアとアルマーナフが姿を見せ、降ろした荷物を運んで行く。

「彼は……？」

どこかで見たようなと、トルデスが考えているとサリアが微笑んで答えた。

「お手伝いをしてくださっている方です」

トルデスもリデアも、黙って頷くだけだった。素性は解らないが、普通ではない雰囲気は何となく予想は出来たからだ。心配ではあったが、二人とも余計な詮索はしない方がいい気がしていた。

女性陣が世間話をする他は会話もなく、黙々と作業は進む。しかしそうしながらも、トルデスはアルマーナフの顔を思い出そうとしていた。どこで見たのか、それはとても重要な事のような気がした。最近見た顔を思いだし、彼は一致する一つの人相に一瞬、動きを止めた。そして何気ない仕草で、そっと確認をする。

（間違いない！）

体が震えた。酒場で見た凶悪犯の手配書、それこそがアルマーナ

フの顔だったのだ。サリアはそのことを知っているのだろうか。否、知るはずはない。警邏隊に追われていることぐらいは簡単に想像出来るだろうが、どれほどの罪を犯したのかまでは塀の中では知ることなど出来ないだろう。

トルデスの脳裏に、一生遊んで暮らせるほどの賞金が浮かんだ。自分に転機が訪れたことを感じる。

毎日、朝から晩までヘトヘトに働き、楽しみと言えば酒場で飲む安い酒くらいだ。妻にもずいぶん苦勞を掛けていた。こうしてサリアの元へ訪れるのを止めれば少しは樂が出来るかもしれないが、どうやらリアにその気はなさそうだった。

これまでの苦勞を考えれば、それが報われても贅沢な望みではあるまい。捕らえることは無理だろうが、通報なら出来る。幸い、塀の外でこのことを知っているのは自分と妻だけなのだ。そしてきつとアルマーナフは、通報されるなど考えてもいないはずだ。トルデスは頭の中で、手順を考えてみる。

賞金金額は無理だろう。だが、半分はもらえるかも知れない。いや、半分以上を望むべきだ。こんなチャンスはきつと、もう一生ないだろう。交渉次第では上手くいく。

「ご苦勞様でした」

サリアが礼を言い、塀の向こうに戻って行った。いつも通りに穴がわからないように絵を戻し、空になった馬車で歸路につく。手綱を握り、焦る気持ちを抑えるようにのんびりと馬を走らせた。揺れる馬車の上で、トルデスは笑みをこぼした。すべては簡単だ。自分のすべきことは、警邏隊に情報を渡すだけでいい。危険な事はない。妻に悟られぬよう平静を保とうとするが、自然とゆるむ顔をどうすることも出来なかった。

一方、そんな夫の様子を隣で見ていたリアは、内心でホツと安堵していたのだ。夫がサリアの元へ行くのを反対していたのはわかっていた。自分のわがままで、夫にも迷惑を掛けている。それを自覚しているからこそ、今日の夫の反応が心配だったのだ。

しかし、どうやらすべては杞憂に終わったようだ。

（やっぱりあの人も、私と同じ気持ちなのだ。旦那様のご恩に報いることが少しでも出来れば、それが何よりも嬉しいことなんだからね）

機嫌の良いトルデスの様子に、リデアはそう信じて疑わなかった。

第十話 感謝

心配そうに覗き込むメリルの顔があった。体が重く、思うように動かない。霪ちやがかかった頭で、ようやく自分が拘束されていることを思い出す。意識が鮮明になったかと思えば、すぐにまた混濁した。それを夕べから、何度も繰り返していた。そういえば、あの男が忍んでやって来たはずだ。何もせず帰って行ったらしく、まだ生きている自分がとても悲しかった。

死にたいわけではない。けれど、生き続けることに希望など見出せなかった。ならばいっそのこと、早く楽になりたい。

「どうしたの？」

彼女が呻くと、メリルが耳を寄せた。トイレに行きたいことを告げると、少し困った顔になる。病気でもないのに下の世話を頼むのはとても惨めだと彼女が言い、メリルは仕方なく拘束を解き、まだおぼつかない足取りの彼女を支えてトイレに向かった。

彼女は個室の中で壁にもたれ、スカートと下着を降ろすと便座に座る。ほっと息を吐き、排泄を行う。体の力を抜き、頭を抱えて目を閉じた。出て行く汚物に反し、胸の裏側で何かがへばりついているのがわかる。それはとても不快なもので、吐き気を呼び起こした。下半身にずんと重く何かが引つかかるような感覚があり、それがうねり暴れるようにして脳天まで昇る。内側で暴れる正体のわからぬものは、激しい痛みと苦しみを宿主に与えた。

彼女は、座っていることすら辛い全身の苦しみに、低く呻いた。

(タスケテ……)

言葉にならぬ声が、そう告げていた。嫌な感覚だけが、じわじわと心と体を浸食する。正常な意識を保つのが難しいほど、激しい不快感に彼女は何度も嘔吐した。しかし出るものが何もなく、ただ、こみ上げる吐き気に身を震わせて前屈みに倒れ込む。

強く爪を立て、床の板を引っ掻いた。苦しくて、苦しくて、涙と

涎が溢れても、吐き気は止まない。嘔吐反射だけが繰り返され、やがて寒気に襲われた。

全身が震え、意識がモヤがかりハッキリとしない。自分が壊れてゆく。明確にそう感じながら、彼女は迫り来る闇に抗った。思い浮かぶ夫の顔、そして大切な一人息子のエルリッド。一瞬、暖かなものが胸に広がるが、すぐに消えてしまう。

(神様！)

彼女は祈った。何でもよかった。救ってくれるものなら、すぐれるものなら何でも良かった。自分が自分であるうちに、誰でもいい。「殺して……ください」

アルマーナフたちが戻ってくると、髪を振り乱したメリルが走り寄ってきた。

「コルダさんが……ああっ！ 私が拘束を解いたから！」

「落ち着いて、話してください」

オルネアが優しく声を掛けると、ようやくメリルは落ち着きを取り戻し始めた。息を整えたメリルの話によれば、トイレを出た直後にコルダが突然暴れだし、押さえ付けるメリルを突き飛ばして奇声を発しながら外へ走り出て行ったらしい。外では子供たちが遊んでおり、エルリッドが声を掛けると、まるで怯えるように両手を振り回して森の奥に向かい、それをエルリッドが追いかけたのだと言う。「ともかく、コルダとエルリッドを探しましょう」

メリルのことはサリアに任せ、アルマーナフとオルネアは二手に分かれて探すことにした。アルマーナフは無関係だと言って断ることも出来たが、何故かあの親子の顔が脳裏に浮かんで離れなかったのだ。

母親を殺して欲しいと頼んだ息子、自分を殺して欲しいと願った母親。もしあの夜、自分がコルダを殺していればこんな騒ぎにはならなかっただろう。しかし、そうすることがどうしてもあの親子の

幸せになるとは思えなかったのだ。

だが、それはとても奇妙な感情だったのかも知れない。多くの命を簡単に踏みにじって来た自分が、何を今更、他人の幸せを心配しているのか。アルマーナフは、胸の奥で見え隠れしている気持ちに、心を乱した。これは、何なのか。

そんなに死にたいのなら、殺してやれば良かったのに……舌打ちをしたアルマーナフは、薄暗い木陰で蠢くものを見つけた。目を凝らすと、それはエルリッドに馬乗りになり首を絞めているコルダだった。

アルマーナフの中で、何かが震えた。瞬間、溢れ出る感情に押されるように走り出す。そして、そのままコルダに体当たりをした。もつれて腐葉土の上を転がったコルダは、アルマーナフを突き飛ばして後ろに飛び退く。

「母ちゃん！」

対峙するように、エルリッドが立ち塞がる。その手には、刃渡り三十センチもの刀が握られていた。あれは、アルマーナフが持っていたものだ。適当に放りだしておいたが、それを持ってきたようだった。

「お、俺が、楽しんでやるから」

震える、今にも泣きそうな声でエルリッドが言うが、コルダはもう自分の息子を認識することすら出来ないらしく、歯を剥いて低いうなり声をあげるだけだ。

「おい」

アルマーナフが声を掛けると、エルリッドは一瞥し、小さく応えた。

「ごめんなさい。俺、逃げてた。怖くて、逃げていたんだ。一番重要なことを他人に任せて、それで安心しようなんて……俺、バカだから、自分の手でやる。自分の手を汚してでも、母ちゃんを助ける」

「母親を殺して、何を助けるって言うんだ」

「だって、わかるだろ？ もう、どうしようもないんだ。もう、俺のこともわからなくなっただんだもの」

血が滲むほど、アルマーナフは唇を噛んだ。

「何だって言うんだ」

吐き捨てるように呟くと、アルマーナフはエルリッドの手から刀を奪い取った。

「あっ！」

代わりに、アルマーナフが刀を構えて対峙する。

「下がってろ」

何故、自分がこんなことをしているのかわからなかった。上手く表現することの出来ない激しい感情が、彼の中で暴れ回っていた。

「俺はな！」

久しぶりに出す大声。奥底から込み上げる想いを、アルマーナフは叫んだ。

「神様じゃないんだ！」

コルダが走った。同時に、アルマーナフも地面を蹴る。突進するコルダを、彼は全身で受け止めた。激しく頭突きを交わし、唸る喉元に刀を押しつける。

コルダは刀を持つアルマーナフの腕を掴み、反対の腕はアルマーナフが掴んだ。そのまま力が拮抗し、わずかに震えるばかりでどちらも動かない。

「くっ……」

アルマーナフは大きく首を反らせ、力いっぱい頭突きをする。何度も、何度も繰り返し、自身の意識も一瞬、遠のきかけた。それでも止めず、やがてコルダが体を仰け反らせ、そのまま腕を掴み合っただまま倒れ込んだ。コルダの上に、アルマーナフが馬乗りになる。刀でこすれ、コルダの首筋に血が滲んでいた。

力を込め、刀を横に引けば命を奪える。それは今までのアルマーナフには簡単なことだった。しかし、心に引つかかる何かためらがそれを躊躇ためらさせた。すると、その迷いがまるで伝わったかのように、コル

ダの体から力が抜けた気がした。驚いて顔を見ると、さきほどまでの獣のような表情ではない。優しく、暖かな母親の眼差しで、じつと彼を見つめていた。

ありがとう……。

乾いた唇が、そう動いた気がした。瞬間、アルマーナフは刀を横一線に引いた。溢れ出る鮮血で染まる視界は涙で滲み、走り寄るエルリッドの姿が霞かすんだ。

「そんなのは……ずるい」

よろよると立ち上がりながら、アルマーナフは刀を落とした。そして、まるで初めて人間を殺した時のように、声を上げて泣いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9264x/>

血に穢れぬ白い綿

2011年12月13日01時54分発行